

おぐらさんそうしきしわか
小倉山荘色紙和歌

折本装 歌:絹本著色 絵:紙本著色

縦 32.3 cm 横 26.0 cm

江戸時代前期(寛文5年・1665頃) 松井文庫所蔵



小野小町



柿本人麿



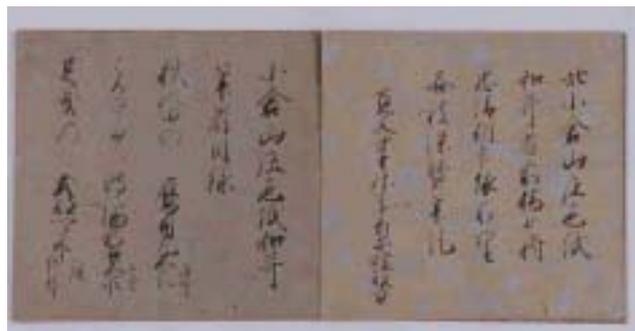
在原業平

現在でも、わたしたちに親しまれている「百人一首」は、「小倉山百人一首」ともいわれ、鎌倉

時代初期の歌人・^{ふじわらのていか(さだいえ)}藤原定家(1162~1241)が京都・^{おぐらやま}小倉山の山荘で選んだといわ

れる百首の歌です。^{てんじてんのう}天智天皇から^{じゅんとくてんのう}順徳天皇までの、百人の歌人の秀歌が一首ずつ集められており、定家以降、和歌の教科書または書道のお手本として、文人たちに尊重されてきました。百人一首を、現在のようなカルタ遊びとして楽しむようになったのは、江戸時代の中ごろといわれています。

この作品は、百首の和歌とその歌の作者(歌人)の絵姿を^{しきし}色紙に書いて左右に貼り付けたものです。まず、和歌のほうは一首ずつ筆跡が異なり、それぞれ^{りゅうれい}流麗で^{かくちようたか}格調高い書体で書かれています。カルタ遊び以前の百人一首が、書道のお手本とされていたことが、これによりよくうづけます。



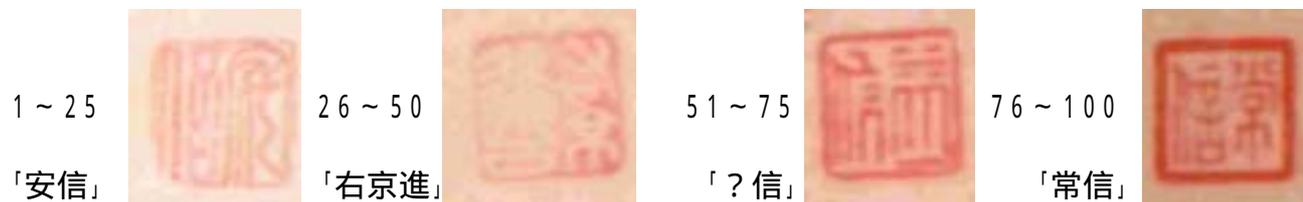
本品には「**筆者目録**」が付属しており、それによれば京都の^{くぎょう}公卿たち 50 人が、それぞれ

2 首ずつを書いたものであることがわかります。そのメンバーは次のような人々です。

鷹司左大臣房輔公、轉法輪前右大臣公富公、八條宮穩仁親王、道寛法親王、常信法親王、堯然法親王、良尚法親王、二條前康道公、西園寺前左大臣實晴公、徳大寺前右大臣公信公、大炊御門前右大臣経孝公、九條右大臣兼晴公、久我前右大臣廣通公、近衛内大臣基熙公、油小路大納言隆貞公、坊城大納言俊廣公、中院大納言道茂卿、大炊御門大納言経光卿、今出川大納言公規卿、日野前大納言弘資卿、持明院前大納言基定卿、柳原前大納言資行卿、^{からすまる}烏丸前大納言^{すけよし}資慶卿、松木前大納言宗條卿……………など、そうそうたる顔ぶれです。なるほど、立派な字をお書きになるはずで

左大臣、大納言などは禁裏での官職名ですが、これは**寛文 5 年** (1665) 6 月から 8 月当時のもので、本作品の歌部分が書かれた時期を知ることができます。「筆者目録」によれば、この和歌色紙は、「前橋少将忠清朝臣の所望により各々筆をとられた」との、飛鳥井雅章による寛文 10 年 (1670) の説明が付されています。

また、絵の部分は、25 図ごとに異なる印が押されており、^{かのうやすのぶ}狩野安信、^{つねのぶ}狩野常信など、当時、御所の障壁画制作に携わっていた狩野派の絵師による作品であることがわかります。



さて、和歌の筆者の中には、八條宮穩仁親王^{やすひとしんのう}や道寛法親王など、^{ごみずのお}後水尾天皇 (1596 ~ 1680) のお子様たちのお名前もあります。後水尾天皇といえば、幕府と対立して讓位し、その後 4 代にわたって院政を執った天皇で、^{いんせい}修学院離宮^{しゅうがくいんりきゅう}の造営者としても知られるように、江戸時代前期の文化を代表する、すぐれた芸術作品を多く生み出した宮廷サロンの中心人物でした。

この作品は、そうした人々が行き交う、たいへん豊かな文化的環境の中で生まれた作品といえましよう。そのような作品が、なぜ松井家にあるのでしょうか。^{しょうひんけん}松浜軒を建てたことで知られる松井家 4 代目の直之公 (1638 ~ 1692) は、本作品の筆者の一人である^{からすまるすけよし}烏丸資慶公の娘・房姫を夫人に迎えています。資慶公の母は、^{ただおき}細川忠興^{さんさい} (三斎) 公の娘・万姫ですから、房姫は三斎の^{ひまご}曾孫にあたります。そうした縁が、この作品の入手に関係したのかもしれませんが。